

# 青い花の香り

小川未明

青空文庫



のぶ子こという、かわいらしい少女おとめがありました。

「のぶ子こや、おまえが、五つ六つのころ、かわいがってくださつた、お姉さんねえの顔かおを忘わすれてしまつたの？」と、お母さまかあがいわれると、のぶ子こは、なんとなく悲かなしくなりました。

月日つきひは、ちようど、うす青い水あおみずの音おとなく流ながれるように、去さるものです。のぶ子こは、十歳さいになりました。そして、頭かしらを傾かたむけて、過すぎ去さつた、そのころのことを思おもい出だそうとしましたが、うす青い霧きりの中に、世界せかいが包つつまれているようで、そんなような姉さんねえがあつたような、また、なかつたような、不確ふたしかさで、なんとなく、悲かなしみが、胸むねの中なかにこみあげてくるのでした。

「そのお姉さんは、いまどうしていなさるの？」と、のぶ子は、お母さまに問いました。

「遠方へ、お嫁にいつてしまわれたのよ。」と、お母さまも、その娘さんのことを思い出されたように、目を細くしていわれました。

「遠方へつてどこなのですか。」と、のぶ子は黒い、大きな目をみはつて、お母さまにききました。

「幾日も、幾日も、船に乗つてゆかなければならない外国なんだよ。」

こう、お母さまがいわれたときに、のぶ子は思わず、目を上げて、空の、かなたを見るようにいたしました。

「ほんとうに、いま、そのお姉さん<sup>ねえ</sup>がおいでたなら、どんなにわたしはしあわせであろう。」と、のぶ子<sup>こ</sup>は、はかない空想<sup>くうそう</sup>にふけたのであります。しかし、その願<sup>ねが</sup>いもかまわなればかりか、せめて、そのお姉さん<sup>ねえ</sup>の顔<sup>かお</sup>を一目<sup>ひとめ</sup>でもいいから見<sup>み</sup>たいものだと思<sup>おも</sup>いました。

「お母<sup>かあ</sup>さま、そのお姉さん<sup>ねえ</sup>は、どんなお方<sup>かた</sup>でしたの？」と、のぶ子は、どうかして、そのかわいがつてくださったお姉さん<sup>ねえ</sup>を、できるだけよく知<sup>し</sup>ろうとして、ききました。

お母<sup>かあ</sup>さまは、また目<sup>め</sup>を細<sup>ほそ</sup>くして、過<sup>す</sup>ぎ去<sup>さ</sup>った日<sup>ひ</sup>を思<sup>おも</sup>い出<sup>だ</sup>すようにして、

「それは、美<sup>うつく</sup>しい娘<sup>むすめ</sup>さんだったよ。みんな通<sup>とお</sup>りすが<sup>ひと</sup>る人<sup>ひと</sup>が、振<sup>ふ</sup>

向<sup>む</sup>いていったもんです。」と、いわれました。

「どうか、そのお姉<sup>ねえ</sup>さんの写<sup>しゃ</sup>真<sup>しん</sup>でも見<sup>み</sup>たいものです。」と、のぶ子<sup>こ</sup>は、ほんとうにそう思<sup>おも</sup>いました。

「いまごろ、どうなされたか。ほんとうに写<sup>しゃ</sup>真<sup>しん</sup>があつたら、いのだけれど……。」と、お母<sup>かあ</sup>さまは、その後<sup>ご</sup>、たよりのない、娘<sup>むすめ</sup>さんのことを思<sup>おも</sup>い出<sup>だ</sup>して、やはりのぶ子<sup>こ</sup>と同じ<sup>おな</sup>ような悲<sup>かな</sup>しみを感<sup>かん</sup>じられたのであります。

その年<sup>とし</sup>の秋<sup>あき</sup>の、ちようど彼岸<sup>ひがん</sup>ごろであります。外<sup>がい</sup>国<sup>こく</sup>から、小<sup>ちい</sup>さな軽<sup>かる</sup>い紙<sup>かみ</sup>の箱<sup>はこ</sup>がとどきました。

「だれから、きたのでしょうね。」と、お母<sup>かあ</sup>さまはいつて、差<sup>さ</sup>しだ出<sup>し</sup>人<sup>にん</sup>の名<sup>な</sup>まえをぐらんなさつたが、急<sup>きゆう</sup>に、晴<sup>は</sup>れやかな、大<sup>おお</sup>きな

声こえで、

「のぶ子こや、お姉さんねえからなのだよ。」といわれました。

そのとき、のぶ子こは、お人形にんぎょうの着物きものをきかえさせて、遊あそんでいましたが、それを手放てばなして、すぐにお母さまかあのそばへやってきました。

「わたしをかわいがってくださいったお姉さんねえから、送おくつてきたのですか？」と、のぶ子こはいいました。

「ああ、そうだよ。」

お母さまかあは、その小さいちい、軽い箱はこのひもを解ときにかかりながら、「なんででしょうね？」といわれました。

秋あきの静しずかな、午後ごごでありました。弱よわい日ひの光ひかりが、軽かるい大地だいちの上うえ

にみなぎっていました。のぶ子は、熱心に、母が、箱を開けるのをながめていました。やがて、包みが解かれると、中から、数種の草花の種子が出てきたのであります。

その草花の種子は、南アメリカから、送られてきたのでした。「きつと、美しい花が咲くにちがいない。」と、みんなは、たのしみにして、それを黒い素焼きの鉢に、別々にして植えて大事にしておきました。

ほんとうに、久しぶりで、そのお姉さんからは、たよりがあつたのです。そして、その手紙の中には、「のぶ子さんは、どんなに大きく、かわいらしく、おなりでしょうね。」と書いてあつたのです。



この種子を土に下ろした日から、花の咲く日が待たれました。

その年も暮れて、やがて翌年の春となったのであります。

「お母さん、南アメリカの温かいところに育つ花ですから、こちらでは咲かないかもしれませんね。」と、のぶ子は、ある日、お母さまに向かつていいました。

このとき、もう、黒い素焼きの鉢には、うす紅い芽や、ねずみ色に光った芽が出ていました。

「よく、日の当たるところに移して、大事にしてごらんなさい。」と、お母さまは、それに対して答えられました。

春の彼岸が過ぎて、桜の花が散ったころ一つの鉢から真紅な花が開きました。その花は、あまりに美しくもろかったのでありま

す。そして、その日の黄昏方、吹いてくる風に散ってしまいました。

もう一つの鉢からは、青色の花が咲きました。しかし、このほうは、珍しく、元気がよくて、幾つもおなじような花を開きました。そのうえ、ほんとうになつかしい、いい香りがいたしました。のぶ子は、青い花に、鼻をつけて、その香気をかいでいきました。が、ふいに、飛び上がりました。

「わたし、お姉さんを思い出してよ……。」こう叫んでお母さんのそばへ駆けてゆきました。

「わたし、あの、青い花の香りをかいで、お姉さんを思い出したの、背のすらりとした、頭髪のすこしちぢれた方ではなくって？」

といました。

「ああそうだったよ。」と、お母<sup>かあ</sup>さまは、よくお姉<sup>ねえ</sup>さんを思い出<sup>だ</sup>したといわぬばかりに、我<sup>わ</sup>が子<sup>こ</sup>の顔<sup>かお</sup>を見て、につこりと笑<sup>わら</sup>われま



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷発行

1981（昭和56）年1月6日第7刷発行

※表題は底本では、「青《あお》い花《はな》の香《かお》り」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年7月16日作成

2012年9月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 青い花の香り

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>